

研究論文

## 日中対照表現論－意識（日→中）について（Ⅱ）－

藤田昌志

### A Contrastive Study Between Japanese And Chinese － On “Free Translation”: Part II －

FUJITA Masashi

#### 〈Abstract〉

When we think about the methods of translating Japanese into Chinese, there is the direct method of translation at one end, and the “free translation” method at the other end. By “free translation” I mean that there is no exact correspondence between the words and sentences in the two languages, yet there is still correspondence in the meaning. This article studies the types and reasons for free translation.

In section 2, the types of free translation are discussed. These include: free translation of indirect expressions in Japanese (J) into direct expression in Chinese (C) (sect. 2.1), free translation from J into rhetorical questions in C (sect. 2.2), free translation to “reverse” (sect. 2.3), and free translation from J to explanatory expressions in C (sect. 2.4).

In section 3, the reasons why free translation is needed because of the difference in expressions between J and C is considered according to the following classification: free translation because of the typical difference between expressions (sect. 3.1), free translation because of the difference between particles in J and “Jieci” and “Jieguobuyi” in C (sect. 3.2), free translation because of differences in expression for parts of the body (sect. 3.3), and free translation because of other differences in expression (sect. 3.4).

キーワード: 表現のズレ、助詞、介詞(介詞)、結果補語(結果補語)、  
肉体部分の表現

#### 序

「日中対照表現論－意識（日→中）について－（Ⅰ）」では二、「意識の類型」として二－1「間接的表現（日）の意識（＝直接的表現（中）への意識）」二－2「反語表現（中）への意識」二－3「「逆から」の意識（中）」について考察した。又、二－1「間接的表現（日）の意識（＝直接的表現（中）への意識）」の下位分類として二－1－①「肉体部分の慣用句（日）の意識」二－1－②「抽象的表現（日）の意識」二－1－③「動作について

の間接的表現(日)の意識」があり、それぞれについても言及した。本稿ではそれらに続けて二-4「説明的表現(中)への意識」三「意識の起こる理由からみた分類-表現のズレによって起こる意識-」について考察する。以下、各論に移る。

## 二-4 説明的表現(日)の意識

以上、見てきた意識(日→中)例の他に次のようなもの(異なった角度からの再検討も含む)も存在する。

### 二-4-① 日本語的表現(日)の意識

それぞれの言語に固有の表現というものがあるであろう。そして、それは他の言語には明示的(explicit)な表現として存在しないために説明的表現となる。(そのことだけをもって両言語の表現の異同を云々するのはまちがいであるとしても<sup>(12)</sup>)固有の表現というものの存在は無視できないであろう。その意味でこの項をたてることには、説明的表現(中)への意識を通じて、逆に日本語に固有な表現、日本語的表現を照射するという意味があるであろう。

二-1-①では「肉体部分の慣用句(日)の意識」として「目」「眼」や「口」「首」「耳」等肉体部分の慣用句のあるものがより具体的、説明的に中国語に意識されるのを見たのであるが、それらは大きくはこの項で扱う「説明的表現(中)への意識」の下位分類として存在するものでもあろう。そして、慣用句には「(1)単語の表す本来の意味と直接関係づけられないもの(どじをふむ・ねこをかぶるなど)と(2)単語の本来の意味を比喻(ひゆ)的に用いたもの(骨が折れる・顔がつぶれる・鼻が高いなど)とがある」<sup>(13)</sup>ことを考えれば二-①ではそれら(1)(2)の分類には意を用いなかったといえる。ここで、そのことに注意して考えると、二-①で既述のものでは(1)に属するものとして「大目に見る」(“不(会)找麻烦”)／「口を聞く」(“斡旋”)／「顔が利く」(“有交情”)／「耳にする」(“听到”)などを挙げることができる。又、この他に「頭を切り替える」(“转变思想”)／「顔が売れる」(“出名”)／「耳よりな(話)」(“值得一听的(活)”)／「(どこの)馬の骨」(“来历不明的家伙”)<sup>(14)</sup>なども(1)に属するものであろう。

もちろん(1)に含まれる慣用句には以上のような肉体部分の慣用句だけではなく「相手にまわす」(“以~为对手”)／「甘く見る」(“瞧不起”“往好处想”等)／「気が合う」(“感情融洽”)／「気がする」(“觉得”“感到”)などがある。

(2)に含まれる慣用句は多く、二-①で既述のもの(上に述べた(1)に含まれるものを除いた残りのもの)以外にも「足を洗う」(“从~脱身”)／「頭が下がる」(“钦佩”)「油を売

る」(“闲逛”) / 「荷を下ろす」(“卸下包袱”) / 「右に出る」(“胜过”“比～強”) などがある。

又、慣用句が広くは慣用表現に含まれる<sup>(16)</sup>ことを考えれば「ある社会で特に用いられる通用語」(など一般に慣用語と呼ばれるもの)<sup>(17)</sup>に含まれる「一目おく」(“钦佩”) / 「板につく」(“老练”“合身”) や故事・ことわざの類にも注意を払う必要があるといえる。

注意しなければならないのは以上のものの多くがいずれも中国語では説明的表現となっているということである。中国語を母語とする日本語学習者には修得が困難なものの部類に属するであろう。

複合動詞 [V<sub>1</sub>・V<sub>2</sub>] の後項動詞 [V<sub>2</sub>] のうち、補助動詞的要素をもつものは①「減訳」される②“状語”(＝「連用修飾語」)を使用して意識される③“結果補語”(＝「結果補語」)や“方向補語”(＝「方向補語」)を使用して意識される、などによって中国語と対応することになるようである。<sup>(18)</sup>①は除くとして、②③はいずれも説明的表現に意識されている。

又、口頭語も次のように説明的表現に意識されることが多いようである。「彼らは社から支給された握り飯をぱくつきながら～」→“他们一边大口吃着报社提供的饭团、～” / 「佐山は知らん顔をしていた。」→“佐山假装没看见。”

語彙的レベルになると、次のように説明的表現に意識されるものは多々、見受ける。日本語的表現であるといえる。「片田舎」→“偏僻的山村(里)” / 「立てつけが悪い」→“窗门象是关不严实” / 「むきになる」→“认真” / 「全くのお上りさんですので～」→“我是头一回来、～” / 「離れ(に住んでいる)」→“(居住在)屋后的另一个房子” / 「人気者」→“最受欢迎的人物”。

#### 二－４－② 擬態語表現(日)の意識

擬態語表現(日)も説明的表現に意識されることが多い。

(12) 晴れた秋空に赤とんぼがすいすい飛んでいました。

红蜻蜓轻轻地在秋天晴朗的天空中飞翔。

(12)は“状語”を用いた意識例である。この他、「せかせか(歩く)」→“慌慌张张地(走)” / 「こっそり(あとをつける)」→“偷偷地(尾随)” / 「どンドン(減る)」→“一个劲儿地(減少)” / 「しげしげと(見入る)」→“细细(打量)”等、“状語”を用いた意識例は無数に存在するが、次のように“状語”以外のものを使った意識例もある。“専用動量詞”

(=「専用動量詞」)を使ったものには「一瞬、眼鏡の奥で、目がきらりと光るのを感じた。」→“瞬間、我感到他眼睛在眼鏡后面閃了一下。”といった例があるし、“数量短語”(=「数量単語」)を使って「画面がぱっと変わり、工場の場面から彼の故郷の海になる。」→“画面一下子从工厂的场面变成他家乡的大海。”とする意識例もある。又、成語を使い「鬼監督の雷がいつ落ちるか、選手たちは練習中もたえずびくびくしている。」→“不知那凶恶的教练什么时候会发火，运动员们在练习中不时地提心吊胆。”とする場合もある。更に“状態補語”(=「状態補語」)を用い「今週はスケジュールがぎっしり詰まっていた一日もあいていない日がない。」→“这星期的日程都排得很紧、一天空闲也没有。”とした意識例もある。その他、「ぼかんとする」→“发呆”/「ハッとする」→“惊呆”など“結果補語”を使用する場合もあるが、やはり“状語”を用いた説明的表現(中)への意識例が一番、多いようである。

### 三 意識の起こる理由からみた分類

#### —— 表現のズレによって起こる意識 ——

両言語は体系を異にするのであるから、当然のことながら、「加訳」「減訳」「転換」などの操作による対応ということだけでは説明のつかない表現が存在することになる。その観点から「意識」という概念を導入し、二、「意識(日→中)の類型」でその諸相を考察したのであるが、この項ではより「表現上のズレ」という「意識」の起こる理由の面から「意識」について考察してみたいと考える。二が「比喩性」の観点からの「対応」を中心とした分類であるのに対して、三はより、そういった意味の「対応」では説明がつかないものを中心とした分類であるともいえる。

#### 三-1 典型的な表現のズレによる意識

- (13) 最もかわいらしいのはパンダだ。

最可爱的要数熊猫了。(19)

- (14) そんなことはまあどうでもいと高男は思った。(『射程』)

高男转念又想：这等事就由它去吧。(『射程』)

- (15) 「ところがですねえ杉田さん、今度はこっちからお願いだが……………」

(『幸福』)

「對了，杉田兄，現在該輪到我請求你幫忙了。」(『幸福』)

- (13)は【“数(shǔ)”+名詞】の形で「(並はずれた部類に属することを表す)……………」

に数えられる」という意味の“数（shù）”<sup>(20)</sup>を用いた意識例である。日本語の表現より、より密な表現である。(14)は“由”を用いた“由它去”という表現で、元来の「(その)好きにさせろ」という意味であるが「どうでもいい」という日本語と対応させている。(15)は「～の番が回ってくる」という意味の“輪（到）～”という表現を日本語の「こっちから～」という表現に対応させている。(13)(14)(15)に共通して言えることは日本語と中国語の表現の対応に何らかの操作による対応というものが見出せず、「意識」としか言いようのない関係だけが日本語とそれに対応する中国語の間に存在するということである。又、そのことは両言語が体系を異にすることの証左であり、日本語的（又は中国語的）な表現が「意識」の際に表面化するのであって、その表現の差を「表現のズレ」と呼ぶのである。

以上の(13)(14)(15)の他に「表現のズレ」のあらわれたものとして次のような例がある。「御前は行っても可いんだよ。折角誘って呉れたもんだから」→“你去看戏吧！**难得**邀请了咱们。”／「気の利いた新聞記者ならこんな目には誰だって五、六回は会っているよ」→“就是机灵的新闻记者也都**难免**会碰上五六回的这种厄运的啊！”／「わたしは真っ青になりました。」→“我**怕死了**。”他にも類例は多数、存在するであろうが、以上、見たような「表現のズレ」（＝対応が著しく見られない「表現のズレ」）について今後、より精緻な研究を行う必要があるであろう。

### 三－２ 助詞（日）と“介詞”（中）“結果補語”（中）のズレによる意識

次に問題となるのは助詞（日）を含む表現と“介詞”（ex. “用”“向”）“結果補語”（ex. “～在”）（中）を含む表現のズレの問題である。助詞（日）と“介詞”“結果補語”（中）には粗い意味での対応はあるであろうが（ex. 「ペンで字を書く」→“**用**钢笔写字”）現実には次のようなズレもみられる。やはり意識の部類にいられておいた方がよいであろう。

(16) 女二人は尻にハンカチを敷き、足を揃えて草の上に伸ばした。（『地』）

兩個女人**用手帕來墊**在屁股下，把雙腿並排著伸在草地上。（『訂』）

(17) この犀ヶ崖を通るとき、速水たちは肩から下げているズック鞆を小腋に抱え、弁当箱や筆箱の音をことことさせながら、橋の上をいっさんに駆け抜けるのが常だった。（『黯』）

通过犀崖的时候，速水他们经常把**挎在**肩上的帆布书包挟在胳肢窝里，飞也似地从桥上跑过去，饭盒和铅笔盒弄得嘎嗒嘎嗒作响。（『暗』）

(16)は「尻にハンカチを敷く」という日本語の表現を“用手帕來墊在屁股下”と意識した

ものであり、その意識された中国語をもう一度日本語にすると「ハンカチを用いて（ハンカチで？）尻に敷く」となる。「～を」という助詞（日）を含む表現と“介詞”“用～”を含む表現にはズレがみられるが、そのズレを意識によって補っている例である。

類例には「かつて父親はこんな口を実の息子にきいたことはなかった。」→“过去，父亲从来没有用这种口吻同亲生儿子讲话。”といった例があるが、他の日本語の表現が意識されて“用～”となる場合もある。たとえば次例がそうである。「タバコを人差指と中指の間にはさんで～」→“用食指和中指挟着一支香烟～。”

(17)は「肩から下げているズック鞆」という表現を“挎在肩上的帆布书包”と意識した例であり、意識された中国語をもう一度、日本語にすると「肩に下げたズック鞆」となる。「～から」という助詞（日）を含む表現と“～在”という“結果補語”を含む表現にはズレがみられるが、そのズレを意識によって補っている例である。他の日本語の表現が意識されて“～在”となる場合として次のような例がある。「両手で顔を覆った。」→“把自己的脸埋在在双手里。”「～で」という助詞を含む表現は意識され“～在”という“結果補語”を含む表現となっている。

又、意識による日本語の助詞を含む表現と中国語の“介詞”を含む表現のズレの例として「友だちからはもう金は借りられないのかね」→“向你的朋友再借点儿钱，不行？”といったものがある。日本語の助詞「～から」は〔友だち→金の借手（＝この場合「聞き手」）〕といった方向を表すのに対して、中国語の“介詞”“向”は〔金の借手（＝この場合「聞き手」）→友だち〕といった日本語とは逆の方向を表すものである。やはりそこには意識が介在しているといえるであろう。又、「通過する場所を表わす」<sup>(21)</sup>「～を」という「補語」を含む日本語の表現も中国語の“介詞”を含む表現に意識される場合もある。たとえば、「公園を散歩する」→“在公园里散步”／「日本全国を歩き回る」→“到日本各处走走”といった例がそうである。

### 三ー3 肉体部分の表現のズレによる意識

「肉体部分の慣用句（日）の意識」については、すでに二ー1ー①で言及したが、次のように肉体部分の表現のズレが存在することもある。そうした場合も意識に含めて考えることにする。

(18)「そうですね」

中村常務は首をかしげ、ある種のうす笑いを浮べた。（『棲』）

“是呀。”中村歪着头，脸上浮现出某种微笑。（『孤狼』）

(19) 「まるで幽霊の村だわ」

夕暮れが迫って冷気をました風の中で、真紀子が寒そうに体をすくめた。（『黒』）

“简直是座幽灵村啊！”

随着暮色降临，刮来的风刺骨般寒冷。

真紀子不由得缩起脖子，～ （『黒』）

(18)は「肉体のより狭い部分（日）→肉体のより広い部分（中）」へと意識した例である。具体的には「首をかしげ」の「首」を「歪頭」の“头”としている例である。この場合の中国語の“头”は「首から上をいい、顔を含めている場合」<sup>(22)</sup>のそれであり、単に日本語の「頭」と同じでない中国語の“头”である。

こうした肉体のより狭い部分（日）→肉体のより広い部分（中）」の意識例として、「首」を含むものについては「首を傾げる」→“歪头”／「首を振る」→“摇头”／「（～の方へ）首を廻す」→“把头转向（～那边）”／「首をすくめる」→“耸肩”／「首を出す」→“探出头去”などの例がある。又、他に次のような意識例もある。「臉に思い描く」→“在脑海里浮现出～”／「眼をあげる」→“抬起头”／「（銀平も）頬が燃えた」→“（銀平的）脸也发烫了”。語レベルでも日本語と中国語の間に一対一の対応が見られない好例であろう。

(19)は「体をすくめる」を“缩脖子”とした例で(18)とは逆に「肉体のより広い部分（日）→肉体のより狭い部分（中）」の意識例である。類例には次のようなものがある。「顔をかめる」→“皱起眉头”／「手を頭にやる」→“把一隻手掌按在额角上”。

又、以上のような肉体部分の表現のズレだけでなく、広く語レベルでの表現のズレも存在する。そうした表現のズレが起こるのは主として統語（“搭配”）上の要請に基づくのであろうが次のような例がある。「人間の心のなかはどうなっているか知っているかい」→“你知道人心深處是什麼様子？”／「あら、いまでも、いい顔していらっしゃるわ」→“哎哟，你现在这神态真美。”／「「あなた……」夫人はおだやかにいった。」→“「孩子的爸……」夫人平心静氣的對丈夫說：”。最後の例は統語上の理由による意識というよりは言語習慣上の理由によるものといった方がよいように思える例である。

### 三－４ その他の表現のズレによる意識

最後に表現上のズレの意識として言及したいのは次のようなものである。

(20) 「あきらめずにやりましょうよ。我々があきらめてしまったら、地獄がのさばる

ばかりだ」(『死』)

“干吧，不要灰心。我们一灰心，只能使阎王爷更霸道。”(『擬』)

- ②) こんな言葉を叩きつけられて、とっさに答える術を持っている親がいるだろうか。  
(『ポプラ』)

突然被問到這樣的問題時、父母回答得出來嗎？(『白楊樹』)

②)は「地獄がのさばる」という日本語の表現を“使阎王爷(更)霸道”(=「閻魔大王に横暴なふるまいをさせる」)という中国語の慣用的、比喩的表現に意識している例である。こうした慣用的、比喩的表現に意識する他の例として次のようなものがある。「それから、大きな体をしているくせに、臆病なんです。」→“还有，人长得那么粗壮，偏偏胆子比老鼠还小。”/「天候に恵まれれば、～」→“要是老天爷开恩的话，～”/「何をやってるのか分ったもんじゃねえな」→“天晓得他们在干什么。”もちろん、この他にも中国語にはこうした慣用句、比喩的表現は多数存在する。逆に、中国語の表現を適切な日本語の表現に意識する際にも問題となる個所である。

②)は「(言葉を)叩きつけられる」という擬人的表現(日)を“被問到”(=「聞かれる」「たずねられる」)という客観的表現(中)に意識した例である。類例には次のようなものがある。「車の警笛を浴びせられた」→“～响起了汽车的喇叭声”/「この指をあまり酷使したので、この指が反乱を起したんです。」→“因为手指用力过度才引起这病的，～”。擬人的表現の適用可能範囲は両言語によって異なるのであろう。しかし、又、外国語の翻訳が増大していくことによって、ある程度の標準化はなされていくことであろう。

以上の他には熟語表現(中)への意識<sup>(23)</sup>などが表現のズレによる意識として挙げられる。又、二で言及したもので、この三-1, 2, 3で言及しなかったものは、三-4に含まれると考えてよいであろう。

#### 四 結 語

以上、意識(日→中)の諸相に関して、二ではその類型について考察し、三では「意識の起こる理由からみた分類」について考察した。概して言えることは(中国語の表現に比べての)日本語の表現の間接性ということである。それは意識(日→中)の際にとりわけ際だった特徴として顕現するものようである。又、二-4で扱った「説明的表現(中)への意識」は慣用句のうち、(中国語に一对一の対応のない)日本語において明示的(explicit)な(その意味で固有な)慣用句表現や擬態語表現の存在などによって起こるも

のである。

こうした表現の間接性や（固有な）慣用句、擬態語の存在は（日本語を母語としない）日本語学習者が日本語を習得する上で困難な学習個所となるものであるが、それは同時に又、「日本語らしさ」の表出でもある。外国語（本稿では中国語）との一対一の対応が著しくみられない、日本語に固有な、特徴的な表現の存在——そこから生じる意識（日→中）の諸相を考察し、そうした表現の存在に思いを致す次第である。

### 【注】

- (12) 類似表現が、ある意味で、存在することがあるから。
- (13) 同(4)書 p. 310
- (14) 同(5)書
- (15) 陈书玉編（1986）『日语常用短语』上海译文出版社
- (16) 同(4)書 p. 310
- (17) 同(4)書 p. 310
- (18) ①（＝「減訳」される場合）の例として次のようなものがある。（表現の一対一の対応が厳しい意味では存在しない「減訳」例である。語レベルの意識と考えることも可能である。）「それにしても今夜は町がえらく落ち込んでいるね。人がほとんど歩いていない。」（『死』）→“今晚街上可是太冷清了，几乎没有人出来闲逛。”（『死』）／八切亜希子は疲れていた。今日は朝から原稿集めに飛びまわっている。（『死』）→八切亜希子显得很疲倦。今天从早上起就到处奔走收集稿件。（『疑』）②（＝“状語”を使用して意識される場合）の例として次のようなものがある。～人ごとのように、まるで調子づいてしまつてこんなことを喋り立てている。（『掌』）→～她却把它當別人的閒事一樣竟愈說愈投機喋喋不休地又這麼說了：）（『極』）／速水は灼けたコンクリートの上に立ちつくしていた。（『黯』）→速水一直站在灼热的混凝土的地板上。（『暗』）③（＝“結果補語”や“方向補語”を使用して意識される場合）の例としては次のようなものがある。母親は駄菓子の紙袋の口を握りしめて立ち上がりながら、靴の紐を綺麗に結んでいる運転手に言う。（『掌』）→司機在那兒把皮鞋的帶子繫得好帥氣。那母親便把裝了糖果的紙袋袋口抓緊，走了過去，對司機說了：（『極』）／彼らは要するに私同様、敗北した軍隊から弾き出された不要物であった。（『野火』）→总之，他们都和我一样，是被吃了败仗的部队赶出来的废物。（『野火』）
- (19) 北京・对外經濟貿易大学、北京・商務印書館、小学館共同編集（1990）『日中辞典』小学館 p. 1327
- (20) 同(19)
- (21) 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版 p. 108
- (22) 北京・商務印書館、小学館共同編集（1992）『中日辞典』小学館 p. 1444
- (23) たとえば次のような例がある。姉のおどおどしている様子が暁子には見ないでもよく判った。（『青衣の人』）→暁子可以想像姊姊提心吊膽的樣子。（『青衣人』）／「今夜はここへ泊めて戴くわ」

そう言い放つと、鏡子は上がり框にべたりと腰をおろした。(『射程』) → “今晚我要在这儿过夜！”  
鏡子毫不客气地说罢，就无拘无束地坐在入口处的门檻上了。(『射程』)

《用例採取書目一覧》

- ①王宏編 (中華民國 81) 『日語慣用語例解手冊』《人體詞彙慣用語專輯》鴻儒堂出版社
- ②三浦綾子 (1991) 『あのポプラの上が空』 (= 『ポプラ』) 講談社  
朱佩蘭訳 (中華民國 80) 『白楊樹上有藍天』 (= 『白楊樹』) 聯經出版事業公司
- ③松本清張 (S. 39) 『地方紙を買う女』 (= 『地』) (『松本清張短編全集 6 青春の彷徨』) 所収  
光文社)  
鐘肇政訳 (1991) 『訂地方報的女人』 (= 『訂』) (『青春の彷徨』) 所収 志文出版社)
- ④石川達三 (H. 2) 『幸福の限界』 (= 『幸福』) 新潮社  
劉慕沙訳 (中華民國 80) 『幸福の限界』 (= 『幸福』) 遠流出版事業股份有限公司
- ⑤渡辺淳一 (H. 3) 『無影燈 (上)』 角川書店  
渡辺淳一 (H. 4) 『無影燈 (下)』 角川書店  
金中・董亞君訳 (1992) 『白衣的変态』 黑龙江人民出版社
- ⑥森村誠一 (1989) 『死海の伏流』 (= 『死』) 文藝春秋  
柯毅文・黄凤英訳 (1987) 『議案追踪』 (= 『疑』) 军事译文出版社
- ⑦松本清張 (1981) 『馬を売る女』 文藝春秋  
鐘肇政訳 (1991) 『賣馬的女人』 志文出版社
- ⑧井上 靖 (1991) 『流沙 (上)』 『流沙 (下)』 文藝春秋  
呂立人訳 (1986) 『爱的奏鸣曲』 中国文联出版公司
- ⑨有吉佐和子 (S. 54) 『恍惚の人』 新潮社  
秀豊・渭慧訳 (1978) 『恍惚の人』 朝陽出版社
- ⑩森村誠一 (S. 62) 『黒い墜落機』 (= 『黒』) 角川書店  
呂立人訳 (1987) 『黑色飞机的墜落』 (= 『黒』) 中国青年出版社
- ⑪刘月华、潘文娛、故韦华 (1983) 『实用现代汉语语法』 外国语教学与研究出版社
- ⑫郭雅坤、王彦良、赵良編著金慕箴审校 (1987) 『日汉象声形态副词词典』 知识出版社
- ⑬松本清張 (S. 52) 『棲息分布』 (= 『棲』) 講談社  
宋金玉 (1987) 『孤狼』 法律出版社
- ⑭川端康成 (S. 63) 『みづうみ』 新潮社  
林许金・張仁信訳 (1987) 『湖・山之音』 海峡文艺出版社

この《用例採取書目一覧》は (ほぼ) 提出順、引用順に列挙したものである。